

Vināśitvānumāna と Sthirasiddhidūṣaṇa

御 牧 克 己

仏教諸論書に常に混在してあらわれる「刹那滅論 (Kṣaṇabhaṅgasiddhi)」と「恒常性批判 (Sthirasiddhidūṣaṇa)」を明確に区別し、“Sthirasiddhidūṣaṇa”を独立した論書として構成するのは Ratnakīrti であり、その恒常性批判の最終段階のスタイルは, pratyabhijñāna, anumāna, arthāpatti の三点をめぐつて為されるものであることは既に指摘した¹⁾。本論に於ては、従来仏教に伝わる二つの刹那滅論証——Vināśitvānumāna と Sattvānumāna——のうちの Vināśitvānumāna と、恒常性批判のうちの「sahetukavināśatvāt を hetu とする anumāna」をめぐる議論との関係を取上げたい。

先づ、「sahetukavināśatvāt を hetu とする anumāna」をめぐる恒常性批判の紹介から始めよう。諸存在の恒常性を論証することを意図して、対論者 Naiyāyika から提出される問題の anumāna は次の如きものである。

《(主張) 議論の主題となつている諸存在は、各々、滅の原因が近在する以前に滅することはない。

(立証因) 原因をもつて初めて滅するから。

(喩例) およそ、あるもの (A) を原因とするものは、それ (A) が近在しなければ、存在しない。例えば、火等が存在しなければ、煙等〔は存在しないが〕如し。

(適合) これらの諸存在は、原因をもつて初めて滅するものである。

(結論) それ故に、かくの如し、〔即ち、これらの諸存在は、滅の原因が近在するまでは滅しない。〕²⁾》

対論者 Naiyāyika は、「ものが滅する場合には必ず滅をひきおこす原因がなければならぬ」と考えている。例えば、瓶が槌に打たれて滅する場合、槌が滅の原因であつて、槌に打たれるまでは瓶は滅することなく恒常性を保つ、と云うの

1) 拙稿「恒常性批判 Sthirasiddhidūṣaṇa-Ratnakīrti: Shirasiddhidūṣaṇa と TS (P): Sthirabhāvaparikṣā の比較」JIBS vol. XX no. 2 参照。

2) RNA (SSD) 108, 5-7: vivādāspadibhūta bhāvā yathāsvaṃ vināśasahetusannidheḥ prāṇ na vināśinaḥ/ sahetukavināśatvāt/ yad yadhetukaṃ tat tadasannidhau na bhavati/ yathā vahnyādyabhāve dhūmādiḥ/ sahetukavināśāś cāmī bhāvāḥ/ tasmāt tatheti/

である。

これに対する仏教からの批判は「滅」と云われるようなものが実体的に存在することは認められないこと、従つて、上の Naiyāyika の推論式は、実体的に認められないような「滅」を *hetu* とする点で *svarūpāsiddha* の誤謬であることを論証するのに終始している³⁾。槌が瓶を毀すという現象を、仏教側は、槌という滅の原因が瓶の滅を生じた、とは考えない。瓶という *santāna* が絶えて陶片という *santāna* が生じたにすぎず、ものが滅するのは刻一刻の *santāna* の変化として自然の真理であり、滅の原因が近在するからではない、と云うのである。Ratnakīrti が引用する、彼の師 Jñānaśrimitra の偈は、この立場を、簡潔によく示している。

《先づ、〔最初に〕この瓶が見られる。〔次に〕ここに、かくの如く、槌が落ちてくるのが見られる。最後には、陶片の集合が見られる。それ以外の滅は見られない。従つて「非存在 (= 滅)」という言葉は何処に置かれようか。或は、この場合、何がそれ (滅) の原因であろうか。〔何も原因ではない〕。瓶の、自らに依存する、この陶片の連続のみが見られているにすぎないのである。⁴⁾》

以上が Ratnakīrti の伝える「*sahetukavināśatvāt* を *hetu* とする *anumāna*」をめぐる恒常性批判の概要である。注目すべきは、この議論が Ratnakīrti の“*Sthirasiddhidūṣaṇa*”の中で、三分の一以上の場所を占める程重視されている、ということである。その理由は、*Vināśītvānumāna* がこの中に吸収されてくるためであることを、一先づ提示しておいて、次に、*Vināśītvānumāna* と *Sattvānumāna*⁵⁾ の考察に視点を向けることにしよう。

Sattvānumāna とは、「存在性を根拠とする推論式」であり、後期の仏教論理

3) RNA (SSD) 111, 21-117, 8.

4) RNA (SSD) 111, 26-30 = JNA (KBhA) 107, 13-16:

*dr̥ṣṭas tāvad ayaṃ ghaṭo 'tra ca patan dr̥ṣṭas tathā mudgaro
dr̥ṣṭā karparasaṃhatīḥ paramato nāṣo na dr̥ṣṭaḥ paraḥ/
tenābhāva iti śrutiḥ kva nihitā kiṃ vātra tatkāraṇaṃ
svādhinā palighasya kevalaṃ iyaṃ dr̥ṣṭā kapālāvaliḥ//
cf. TS (P) k°k° 373-375; 439-440.*

5) “*Vināśītvānumāna*”, “*Sattvānumāna*” とは、Frauwallner による呼称である (cf. E. Frauwallner: *Dharmottaras Kṣaṇabhaṅgasiddhiḥ*, Text und Übersetzung, S. 217, WZKM Bb. 42 1935) が、“*Sattvānumāna*” という用語は実際に、例えば、RNA (KBhS) 62, 19; 62, 20; RNA (SSD) 121, 7-8 等々に、“*Vināśītvānumāna*” の用語は PVSVT 369, 20; 369, 21 等に見出すことが出来る。

学者の駆使するものであつて、例えば次のようなものである。

《(大前提) およそ存在するものは刹那滅である。例えば、瓶の如し。

(小前提) 議論の主題になつているこれらのものは存在する。

〔(結論) これらのものは刹那滅である。〕⁶⁾》

一方、Vināśitvānumāna は、「滅するという事実を根拠にした推論式」であり、例えば、次のような形をとるものである。

「(主張) 作られたものは、全て刹那滅である。

(立証因) 他の原因に依存せずして滅するから⁷⁾。〕

ものが滅するために、滅の原因は必要なく、自ら刹那毎にもものは滅し、変化している、というのである。従つて、Vināśitvānumāna は、滅は原因をもつ必要はないという「滅無因説」をその徴表とする、と云うことが出来るであろう。この推論式は、Sattvānumāna があらわれる以前のより古い時代に、例えば、Abhidharmakośa 等の諸論書にも⁸⁾、プリミティブな形で論述されるものであつて、「古刹那滅論」と呼ばれる所以である。

Vināśitvānumāna, Sattvānumāna の両者の転換点は、Dharmakīrti に於てである⁹⁾。それは、彼による arthakriyā という存在の定義の発見と深い繋りがあるのであるが、近年 Steinkellner は、Vināśitvānumāna と Sattvānumāna の転換点が、Dharmakīrti の著作の中でも Pramāṇaviniścaya にあることを論証している¹⁰⁾。彼は、Frauwallner の確定した¹¹⁾ Dharmakīrti の主要著作の順序——Pramāṇavārttika, Pramāṇaviniścaya, (Nyāyabindu), Hetubindu, Vādanāyāya——という順序を踏え、その中に取扱われている刹那滅論を仔細に検討した後、

6) RNA (KBhS) 62, 6 etc.: yat sat tat kṣaṇikam/ yathā ghaṭaḥ/ santaś cāmī vivādāspadibhūtāḥ padārthā iti/

7) TS k° 353 取意: tatra ye kṛtakā bhāvās te sarve kṣaṇabhaṅgināḥ/ vināśaṃ prati sarveṣāṃ anapekṣatayā sthiteḥ//

cf. TS k°k° 354-5; TSP (ed. D. Shastri) 167, 23-25; PVSVT 361, 30-362, 9.

8) AKBh (ed. P. Pradhan) 193, 4-18; AKV (ed. U. Wogihara) 345, 19-21; 364, 20-22. Karmasiddhiprakaraṇa (cf. E. Lamotte: Le Traité de l'Acte de Vasubandhu, MCB vol. 4 pp. 214-217; 山口益「世親の成業論」pp. 87-103)

9) cf. Hetubinduṭīkā (GOS no. CXIII) 77, 1-13; 143, 22……etc.

10) E. Steinkellner: Die Entwicklung des Kṣaṇikatvānumānam bei Dharmakīrti. (Festschrift für Frauwallner, WZKSO Bd. 12-13, 1968/1969) SS. 361-377.

11) E. Frauwallner: Die Reihenfolge und Entstehung der Werke Dharmakīrti's. (Asiatica, Festschrift Friedrich Weller, Leipzig) SS. 142-154.

Sattvānumāna の出現は、Pramāṇaviniścaya からであることを結論しているのである。

かくして Dharmakīrti 以後、刹那滅論に関しては、専ら、Sattvānumāna が優位を占め、Vināśitvānumāna は陰を潜めるに至る。しかしながら、全く消滅してしまうというよりはむしろ、その「滅無因説」を徴表として、恒常性批判の一部としての性格を強くすると思われるのである。

それを明らかにする意味で、TS (P) Sthirabhāvaparikṣā を取上げてみたい。この章の構成は、大まかに分けて次の如くである。

TS Sthirabhāvaparikṣā k°k° 350-475

Introduction	k°k° 350-352
Vināśitvānumāna	k°k° 353-384
Sattvānumāna	k°k° 385-427
Sthirasiddhidūṣaṇa	k°k° 428-475

ここにあらわれる Vināśitvānumāna も、「滅無因説」を論証することに終始しているが、その論証の仕方は、1) 滅の原因を想定したとしても、それは何も為すことが出来ないことを論証する部分と、2) Naiyāyika の論師 Aviddhakarna, Uddyotakara の「滅有因説 (sahetukavināśa)」を、滅が実体としては成り立たないことを云うことによつて批判する部分¹²⁾、とから成り立っている。後者が、Ratnakīrti の伝えていた恒常性批判と全く一致することは云うまでもない。Vināśitvānumāna が Sthirasiddhidūṣaṇa として吸収される可能性はここに明らかである。

前者、即ち、「滅の原因が何も為さないこと」の論証についても若干考察の余地がある。それには、以下の如き二つの特徴的な論証方法がある。先づ第一は、滅の原因によつて作られる滅が存在であるのか非存在であるのか、という alternative に始まり、いずれの考えに立つても滅の原因は滅を造り出すことは出来ないという結論に終るものであつて¹³⁾、この種の論証にはステレオタイプなものである。

12) TS (P) k°k° 367-384.

13) TS (P) k°k° 358-366.

むしろ第二の論証の方が、他の諸論書と関係する点で重要である。即ち、ものが自らの原因から生じる場合、そのものは、本質的に滅することを本性として (naśvarasvabhāva) 生じてくるのか、それとも滅しないことを本性として生じてくるのか。滅することを本性として生じてくるなら、滅の原因をまたなくとも滅するはずであるから、滅の原因はそれに対して何も為さない。一方、滅しないことを本性とするなら、滅の原因がそれに变化を与えることは不可能であるから、滅の原因はやはり何も為すことは出来ず、従つて、ものは自ら刻一刻変化しているにすぎない、と結論されるのである¹⁴⁾。

これと類似の議論は、Karaṇakagomin の Pramānavārttikasvavṛttiṅikā, Mokṣākaragupta の Tarkabhāṣā, Jaina の Gunaratna の Tarkarahasyadīpikā 等の諸論書にもあらわれ¹⁵⁾、Karaṇakagomin はこれが Vināśitvānumāna であることを明言している。とすれば、Dharmakīrti 以後にも、Vināśitvānumāna は依然その勢力を保っているかの如くである。しかし、この場合、それら諸論書の性格を考慮する必要がある。即ち、Tarkabhāṣā は TS 共々、綱要書的な性格が強く、また Karaṇakagomin の注は、未だ Vināśitvānumāna しかもたない Pramānavārttika の注釈である。さらに、Tarkarahasyadīpikā は、仏教外の Jaina の著者になるものであり、しかもその議論中には、Sattvānumāna の概念をも導入するという混乱を生じている¹⁶⁾。

これらの諸点を鑑みれば、Vināśitvānumāna が積極的な刹那滅論証として Sattvānumāna と対等な価値を維持しているというよりはむしろ、刹那滅論証そのものは Sattvānumāna に譲り、自らは、滅無因説論証という点でのみ生命を維持し続けていると考えられる。そして、Ratnakīrti は滅無因説論証を、専ら、恒常性批判に用いていたことと併せ考えるならば、Vināśitvānumāna は後代にはその大部分が恒常性批判に吸収されると考えるのが最も妥当である。

(1972年9月)

14) TSP 176, 23- 178, 2 (ad. TS k°k° 383-384)

15) PVSVT 369, 6-13; TBh 34, 17-36, 1; TRD (Bibl. Ind. CLVII) 28, 7-30, 13 = (ed. Mahendra Kumar Jain, 1969) 43, 10-48, 5.

16) ここで Sattvānumāna の概念とは、刹那滅論証の遍充関係を論証する際に用いられる「継時的・同時的作用性 (kramayaugapadya)」を指す。詳細については別稿を期している。